

## 第9章 地理教育制度史に位置付けた地理学研究者の地理教育観

第5章から第8章まで、各地理学研究者の地理教育観を個別に述べた。この個別の地理教育観を、第2章でなされた地理教育制度史による時期区分に重ね合わせることによって、地理教育制度史が旧制中学校の地理教育史の分析フレームとして有効であるか否かについて、本章では検証する。

### 第1節 中学校地理科教育の成立期

#### 第1項 草創期(1872～1902)

山崎は、1895年帝国大学理科大学地質学科を卒業した後、大学院に入学し、日本の地質学の開祖的存在である小藤文次郎<sup>1</sup>(1856-1935)理科大学教授の指導を受けた。その後、1898年11月から3年間ドイツ・オーストリアに留学し、J. J. ライン、A. ペンクら地理学者から指導を受け、帰国した。

小川は、1896年に帝国大学理科大学地質学科を卒業し、大学院に入ったが1897年退学、地質調査所に勤める。房総半島の火成岩採集、別子銅山の地質等を調査した。1900年万国博覧会と地質学会議出席のためにフランスへ洋行し、帰国後中国鉱物資源の調査を行い、1904年には烟台炭鉱の地質の調査を大本营御用掛として行った。こうした中で、小川は1899年に論文「小学校地理学教授上の注意」を発表し、地理教育に対して具体的な提言を行った。この論文は、小川が教育現場にも十分に配慮していたことを示し、教育現場の事情をふまえた上で、小川の地理学観が形成されていたことを示していた。

ただ、全般的に、この時期における4人の地理学研究者たちは地理教育について目立った活動をしていなかった。

この時期の地理科教科書について第2章第1項で触れたが、山上萬次郎や松島剛が著した教科書を見ると、地名や物産の羅列型記述が多く見られることから、地理教育の本格的な体系だった展開はみられず、文字通り「草創期」と言える。

#### 第2項 「確立期」(1902～1919)

##### (1) 地理学研究者の動向

この時期において、山崎は留学から帰国後、東京高等師範学校教授となり、さらに文検の問題作成委員となったことから、地理教育界においては重要な位置付けとなり、1903年から1915年までの間に約15冊の教科書を発行した。また、教育にとどまらず1912年には東京帝国大学の教授に就任したことで、多くの地理学者を育成することとなる。このことから、地理教育と地理学の両分野において山崎は重要な人物になった。

小川は、1908年に京都帝国大学文科大学教授となり、1912年から1914年にかけて3冊の地理科教科書を発行した。これは山崎に比べれば少ないが、京都帝国大学教授になる前

は小川の職業が地質調査所勤務ということもあって、中国鉱物資源などの調査活動があり、教育や学問というよりも国策のための活動が多く、山崎が地理学や教育において重責にあったのとは対照的であった。

石橋は、1919年に京都帝国大学の教授に昇進した。1921年に京都帝国大学理科大学理学部地質学鉱物学教室が創設され小川琢治がそこへ転出したことにより、その後石橋がその講座を担当することになる。

田中は、1907年に福岡県師範学校を卒業した後、1912年東京高等師範学校本科地理歴史部を卒業、長崎県師範学校(現長崎大学教育学部)教諭となった。1915年東京高等師範学校附属中学校(後の東京教育大学附属中学・高校)講師をへて、1916年東京高等師範学校助教諭となったばかりであった。

石橋や田中の地理教育に関する活動は、この時期においてはまだ本格的には開始されていない。

## (2)教科書記述の詳細化

第1に、この「確立期」の教科書記述の特徴は、地理教育の内容が法令によって整備され、基本的には地理知識を詳細化していく傾向が強く見られたことは第2章で言及した。これは山崎、小川の教科書に一貫して流れている傾向であった。このことに対して、1902年と1911年の「中学校教授要目」で、地理教育について詳細に規定され、暗記を強いることや注入主義を抑えることが言われた。しかし、実際のところ、制度・法令によって地理教育内容を規制することはできなかった。

第2の特徴としては、法令の整備によって教科書も次第に体裁を整え始めたが、その内容には違いが見られた。

具体的には、山崎と小川の教科書において、地理情報を伝える際の方法論が異なっていた。具体的には、教科書に掲載される地図の取り扱いの点で違いがみられたのである。岡田によると、小川は「地質学を専門としながらも、のちに歴史地理学を通して自然と人文の統一を図ろうとした」<sup>2</sup>とされ、この点が山崎とは異なっている。すなわち、山崎は第2章でも言及したが、自然現象と人文現象を関連付けてとらえるという地理学特有の視点を、地理教育にも導入しようとしたが、結局、山崎の考えは教科書には必ずしも反映されてはいなかった。このこと背景には、小川が京都帝国大学において歴史地理学等の学問を確立する必要性から、学内近接分野の研究成果を期待できる立場にあったことと無縁ではなかったことが推察できる。

具体的に、教科書記述の点から両者の比較をすると、山崎の1905年『普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌 上中下』では、

国土広大にして、地形風土到る処に異なるが故に、天産の種類亦同じからず。国民の生業亦従ひて一樣ならず。支那本部は、農産に富み、殊に其西北部を除くの外は到る処

米を産し、揚子江流域並に南清地方には茶、綿、砂糖等を産し、蚕業亦各地によく行はる。西北及び満州は豆、高粱の産を以て名あり。牧畜は支那本部の北部より蒙古、新疆、チベット等、荒漠の地方に行はれ、驃馬、駱駝、羊等は遊牧種族に主として飼養せらる<sup>3</sup>

とある。

一方、小川が著した中学校教科書である、1913年『地理学教科書 外国之部 上中下』の中国の記述では、

国土広大、地味肥沃にして、又商工業振興し、産業の隆盛なる天下無比なり。農業は産業の首位を占め大農法最も発達せり。中部以東の地にありては、最北に燕麦帯あり、中部に小麦帯・玉蜀黍帯・大麦帯東西に連り、南部は甘蔗帯・綿花帯又東西に接す<sup>4</sup>

というように山崎の記述内容とほぼ同様で、自然と人文現象を関連付けた記述ではない。

こうした文字による内容分析以外の両者の相違を見ると、小川の教科書が、地理教育の基本的手法といえる分布図<sup>5</sup>がのせられているのに対して、山崎のものはそうではない点である。例えば、アメリカ合衆国の項では、雨量分布図と農産物分布図を掲載し、自然現象とそこに展開する人文現象を考察するよう配慮しているのである。

雨量分布図つまり自然に関するものと、農産物分布図、つまり人文に関するものを比較した上で、人文現象と気候との関係を知ることは、重要な地理学的視点であり、山崎の地理教育観よりは配慮がみられると考えられる。小川は1913年『地理学教科書 外国之部 上中下』の例言において、「地理学の観念は常に地図と対照するに非ざれば明確なる能はず〔中略〕事実を土地と連関して理解記憶するを便とす」<sup>6</sup>と述べている。

以上のことから、地理知識の伝える方法において山崎と小川には違いがあったことがわかり、それぞれが独自の地理教育観に基づいて、教科書を記述していたことを示す。

## 第2節 中学校地理科教育の展開期

### 第1項 「定着期」(1919～1931)

#### (1) 地理学研究者の動向

山崎は、1919年に東京帝国大学理学部に地理学科を創設し、1925年には日本地理学会を立ち上げた。こうした多忙な時期においても山崎は教科書を7冊発行した。次第に人文現象を地理教育においても重視するとの発言が見られ始めたが、その見解は教科書に反映されることがなかった(第5章)。1929年に山崎が亡くなった後も後継者とされる辻村太郎が補訂というかたちで、山崎の教科書を1934年まで発行し続けた。このことは、山崎がわが国の地理教育においていかに大きな存在であったかを示す。

小川は、1921年に理学部へ転出した後も地理学への関心を持ち続け、1924年には雑誌「地

球」を発行する。この時期に小川は6冊の教科書を発行する。この時期の小川の教科書の特徴は、内容の詳細化を目指した時期であった(第6章)。

石橋は、前任者である小川が理学部へ転出した後、地理学教室を主宰し、1924年に雑誌「地理論叢」の刊行を開始した。もともと石橋は史学出身のため、時代変遷史的に地理を見る立場を鮮明にしていた。1927年から石橋は『日本地理風俗大系』などの編集にみられるように、地理学の成果普及に貢献した。1929年には論文「中等教育に於ける地理教授に就いて」を発表し、この頃から地理教育に対して関心を持ち始め、1931年頃から地理科教科書を多く出版し始める。石橋はこの時期に5冊の教科書・地図を発行するが、その内容は地名を羅列したものが多かった。

## (2) 羅列主義の継続

1902年と1911年の「中学校教授要目」において、地理科の授業において暗記を強いることや知識の注入主義を抑える警鐘があったにも関わらず、実際のところ、制度によってその流れを止めることはできなかったことは前項にて述べたが、この時期になってもその問題の解消はできなかった。

具体的に述べると、「定着期」の地理教科書記述の傾向をいえば、山崎の1924年『新制外国地理 乙表準拠』<sup>7</sup>の「アメリカの農業」では、

農業は甚だ盛で、中央大平原は世界第一の農業地帯をなし、その北部はカナダに続く麦地帯をなし、南部は綿地帯をなす。その他玉蜀黍・煙草などの産が多く、耕作法は大農法である。〔以下略〕

とあり、簡潔な記述内容にとどまっている。また、石橋の教科書である1925年の『新編世界地理』「アメリカの農業」を例にとりあげても、

土地広大肥沃にして、大農式の農業盛に行はれ、玉蜀黍はイリノイ・アイオワ二州を中心とし、ミシシッピ河の流域地方に栽培せられ、世界総生産額の七割を産す。〔以下略〕

という記述であり<sup>8</sup>、地理的知識を事実羅列的にとりあげているにすぎず、1925年『綱要外国地理』でも同様の羅列型の記述であった。

前に見た「確立期」においては、注入主義や暗記主義に対して警鐘をならしていたが、この「定着期」においてもそういった引き続き改善する努力をしなければならないのにもかかわらず、それは見過ごされてしまった形になった。そうした地理教育の内容、方法論の追究よりも、国民道徳養成にこそ力点が置かれたことに原因があるとみられる。

## (3) 地理教育方法論の具体的展開

こうした暗記中心主義の地理教育が行われる中で、田中は、1923年に東京高等師範学校の教授に就任する。前節でも述べたが、長崎県師範学校の教諭や東京高等師範学校の助教諭を経た後の田中の教授就任であった。このことから、田中の1923年以後の地理教育における活躍には、地理教育の具体性に富んだ提言が伴っていく。例えば、1923年7月に論文「独立科学としての地理学」を発表し、授業に於いては地図を使い、グラフ(図表)をつくる実習をしてほしいということが述べられる。また、1925年の論文「地理教授に関する所感の一節」では地図を利用する習慣は義務教育の時代から為されるべきであるとしている。また、1929年1月の論文「外国地誌教授の順序に就きて」では、生徒の心力の発達に適應して内容の程度を高める立場から、外国地誌教授の順序に配慮する必要性をのべている。田中の教科書では、文字情報による知識伝達と言うよりは、視覚をもちいた教材、すなわち直観教材(図や表)が中心に据えられていく。

教科書の地理知識の伝え方において、山崎、小川、石橋と田中は大きな違いがあり、それは文字情報と直観教材との違いとみなすことができ、田中は地理教育における新しい手法を取り入れこんだといえるであろう。

その後、田中は1929年東京文理科大学(後の東京教育大学)が設立されたことで、その助教教授<sup>9</sup>と東京高等師範学校教授を兼任した。このことからわかるように、田中は主に地理教育において重要な立場にあった。

この時期においては、国民道德の養成を行うことよりも、地理知識が羅列され、かつ暗記による注入型の授業が改善されていなかったことがわかる。また、この時期から、制度史では国民道德の養成が行われた時期と位置付けられがちであるが、具体的な内容を吟味すると、田中によってより教育的な方法論が追究されていたことがわかる。

## 第2項 「転換期」(1931～1937)

### (1) 地理学研究者の動向

この時期は、1931年、中学校教授要目が改正になり、自然と人文現象を因果的に捉える方法論、すなわち地人相関的な思考が地理科に導入されたことが大きな特徴であった(第2章)。

実際に、小川はこの時期に、6冊の教科書を発行したが、教科書では自然と人文現象を関連付ける記述が定着し、それを伝える手段として、文字のみではなく観察重視の立場から写真や図表が相当数用いられるようになり、小川においても、地理知識を伝える方法の転換がみられるようになった。さらに、小川が発行した1933年『新外国地理 上下 甲表準拠』では、小川の学問観と教育観が結合されていたことは第6章第3節において言及した。

石橋は、1931年の『新体中等地理 外国之部 上下』で、「国民思想の涵養と人文的事項に重点をおき、わが国に関係のある国を詳述し、歴史的事項を加え、自然人文の因果関係をしめした」<sup>10</sup>と述べており、自然と人文の因果関係を重視する方法論への転機がみられた

<sup>11</sup>。また、同書で石橋は上巻において教授上簡便な地方を取り上げ、下巻では高度な思考を必要とするアジア・ヨーロッパを扱うという教育的な配慮をも示した。

田中は、この時期においても、地理教育について積極的な提言を行った。1932年「地理教育上の諸問題」、1933年「最近地理学の進歩」、1933年5月「郷土取扱の一例」などにおいて、グラフ・地図（分布図）をはじめとする直観教材の適切な使用、記述方針としての地人相関的記述と歴史的な説明、地理区の究明と設定を重視した。こうした田中の教育現場を重視した方針は1928年から一貫して流れていたものであった。

## (2) 地人相関記述にみられる制度と教科書との時間差

1931年に、地人相関的な方法論が制度上地理教育に導入されたが、実際は、田中の1928年『中等外国地理 上中下』や1931年『中学外国地理』目黒書店において、「各地方を説くに当つては能ふ限り最初に地形・気候等の自然を説き、その際それぞれ地形区・気候区的に説述し、且つその場合人文との関係については言及せず、処誌を述べる時に到つて、人文とそれ等との関係を学習者に発見せしめ、最後に人文にて帰納的に統括」し、「各大陸の総説に於ては各地方別に習得した知識の相互の関係を系統づける点に重きを置き、すべて帰納的に説述した。〔中略〕記述は単に羅列的にせず、紙数の許す限り説明的にし、問題は能ふ限り地理的意義の豊富なものを選んだ」と述べていたことからわかるように、制度・法令よりも先に地人相関論が教科書に取り入れられていた。

したがって、「転換期」においては、地理学研究者たちは地理科教科書の記述において、法令の規定よりも先に地人相関論的記述をしていたのである。この法令よりも先に地人相関的な記述をした教科書が出ていたこと背景については後述するが、地理学研究者たちの地理教育観と制度・法令との完全な一致を示しているとは言えないことがわかる。

## 第3項 「変容期」(1937～1945)

### (1) 地理学研究者の動向

1937年以後愛国心養成の教育が国家から求められるようになった(「中等学校教授要目」改正)。その後、1943年からは教科書は国定制となり、それまでの形で教科書を発行することができなくなった。地理科教科書の編集方針が大きな変容を伴う時期といえる。既に1941年に小川は没し、石橋もこの頃には体調がすぐれなかった為、研究活動は減少していった。

田中は、1937年東京文科大学教授兼東京高等師範学校教授、1939年学術研究会議会員となる。論文「支那の地域区分」等を発表するなどした。1930年代後半になると戦争との関わりから、日本に地理的に近い国、関係の深い国を先に学習する考えにかわっていく。例えば、1943年『中等新外国地理改訂版訂正5版』では「東亜に関しては詳細を極め本書の半を当て、その外もわが国に關係の密接な地域及わが国策の参考に資すべき國については多くの紙数を割いた〔中略〕わが国に関する海外の重要資源及我が商品の状態については特に留意してこれを詳細に述べた」と例言にあることからわかる。

1937年に5冊,1940年には1冊,1943年にも1冊を発行した。しかしながら,地理教育に関する言説はなくなり,終戦を迎えることとなる。

(2)地理教育の目的論と体系化の追究

また,この時期には地理教育の目的論が系統的に石橋によって論じられ,系統的に地理教育を樹立しようとする動きを示した。当時,活躍していた石橋と田中を比較考察したい。石橋の『地理教育論』と田中の著書『地理教育に関する論文集』の目次とを比較すると,石橋の著作の方が体系的に地理教育について論じていることがわかる(第9-1表)。田中の著書は,「外国地誌教授の順序に就きて」,「読図(Map Reading)に就きて」,「地理教育に関する所感の一節」,「汽車旅行指導の一例」などにみられるように,教育現場において指導に役立つものや,田中の地理教育に関する所感のようなものが多い。

一方,石橋の『地理教育論』は制度に関する内容や,外国地理教育についても詳細に述べられ,何よりも「地理教育の価値と目的」といった,地理教育の根幹に関わることが述べられていることが大きな特徴である。この点は,田中には欠けている点であり<sup>12</sup>,このことから石橋は,「地理教育の目的と価値」を明確に論じ,地理教育が果たすべき役割そのものを明言しようとしていた。

第9-1表 石橋『地理教育論』と田中『地理教育に関する論文集』の目次の比較

石橋『地理教育論』(1937)	田中『地理教育に関する論文集』(1929)
第1章 地理学の意義 ... 1	独立科学としての地理学 ... 1
第1節 序言 ... 1	再び独立科学としての地理学について ... 19
第2節 地理学の発達 ... 2	最近地理学の進歩 ... 20
第3節 地理学の本質 ... 14	日本地誌教授の単元と其の取扱の順序に就きて ... 25
第2章 地理教育の価値と目的	日本の地理区 ... 35
第1節 地理教育の意義 ... 30	外国地誌教授の順序に就きて ... 55
第2節 地理教育の実際目的 ... 35	地理学的考察の一方法 ... 64
(1)一般教育目的との一致 ... 35	我が国と欧米の夏の気候 ... 72
(2)利用し得べき地理的知識の必要 ... 36	読図(Map Reading)に就きて ... 84
(3)実際目的及び文化的目的 ... 37	関東平野と中央高地 ... 97
(4)世界の啓蒙的知識の獲得 ... 38	地理教育に関する所感の一節 ... 119
(5)国土と住民とに就ての十分なる知識 ... 39	地理教育上の諸問題 ... 129
(6)祖国意識の強化 ... 40	郷土誌の取扱の一例 ... 161
(7)人類愛觀念の養成 ... 41	汽車旅行指導の一例 ... 169
(8)情操の陶冶 ... 43	地理科特別教室に就きて ... 182
(9)職業への貢献と理解 ... 44	独逸と米国との学生(地理学部)気質 ... 200

第3節 現在の地理教育の二要点	...45	地理教育の一系統	...211
第3章 西洋地理教育史の概観	...51	「中等日本地理」の編纂に就いて	...213
〔略〕		「中等新日本地理」の編纂に就いて	...225
第4章 郷土教育の発達	...80	「新中等日本地理」の編纂に就いて	...228
〔略〕		「中等外国地理」の編纂に就いて	...232
第5章 各教育階程に於ける地理学(其の一)	...99	「中学外国地理」の編纂に就いて	...234
〔略〕		「中等新外国地理」の編纂に就いて	...235
第6章 各教育階程に於ける地理学(其の二)	...129		
〔略〕			
第7章 日本に於ける地理教育史	...171		
〔略〕			
第8章 日本国民と地理的思想	...202		
〔略〕			

〔石橋『地理教育論』(1937)・田中『地理教育に関する論文集』(1929)をもとに筆者作成〕

このように、1902年頃から4人の地理学研究者たちは地理教育について活動を本格化し、それぞれの見解を述べ、教科書を著し始めたことがわかる。

ただ、それぞれの地理教育観は、必ずしも制度や法令の変更と一致していたわけではなかった。そこで、地理教育史の内実を検討するためには新たな視点が必要となってくる。それが、次章において述べる教材編成論、教育方法論、目的論といった地理教育論からの視点である。

1 島根県津和野町出身で、藩校養老館で学んだ後、1879年に東京帝国大学地質学科第一期生として、ナウマン博士のもとで地質学を学んだ。翌年ドイツ留学を命じられ、ライプツィヒ大学、ミュンヘン大学で地質学を研究した。1884年帰国後、発見した玄武岩を兵庫県の玄武洞の名にちなんで命名するなど活躍した。1886年に東京帝国大学地質学教授となり、1888年には日本最初の理学博士になった。師にナウマン(E. Naumann, 地質学)、チルケル(F. Zirker, 岩石学)、クレドナー(H. Credner, 地質学)が、大学時代からの友人として和田維四郎、原田豊吉、横山又次郎、渡辺渡、神保小虎らがあり、後継者として、山崎直方、小川琢治、伊木常誠、井上禧之助、脇水鉄五郎、江原真伍、神津淑祐、加藤武夫、矢部長克、坪井誠太郎らがいる。

2 岡田俊裕『日本地理学史論 個人史的研究』古今書院、2000、120頁。

3 山崎直方『普通教育地理学教科書 地理学各論 外国誌 上中下』東京開成館、1905、45-46頁。

4 小川琢治『地理学教科書 外国部 上中下』、1913、67-68頁。

5 町田貞は、「地理学が事象の空間関係を問題として、地理的な見方・考え方の中に事象の地表における分布現象を基本的な思想と持っている以上、分布ということは地理教育における基本

---

概念と考えなければならない」としている(町田貞「地理教育における基本概念」町田貞・篠原昭雄編『社会科地理教育講座1』明治図書,1984)。

6 前掲4) 1 - 2 頁。

7 山崎直方,辻村太郎補訂『新制外国地理 乙表準拠』東京開成館,1924,74-75 頁。

8 石橋五郎『新編世界地理』富山房,1925(初版1923),56 頁。

9 教授は,山崎直方であったが体調が優れず,田中が研究室において指導的立場にあった。

10 石橋五郎『新体中等地理 外国之部 上下』富山房,1-3 頁。

11 また,同例言で「独断的注入主義を避けるため対話や問答で師弟が互いに問題を研究して進む便宜をはかった」と述べている。

12 田中の地理教育観の一端については,近藤裕幸「田中啓爾の地理教育論に関する研究 戦後中学校地理教育論の源流としての影響」(早稲田大学教育学研究科紀要 10-2,2003)で述べた。